



2017年7月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2017年7月
第111号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（48）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（104）（山内 薫）	9
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	14
ご報告とご案内	21
漢文のページ	22
編集後記（木下和久）	24

漢点字の散歩（四十八）

岡田 健嗣



漢点字文の構成を考える

先頃、本会の読者のお一人から、川上泰一先生の推奨された漢点字の文章は、触読には適していないのではないかというお手紙を頂戴しました。短いので、全文を採録してみます。

「いつも 漢点字の 資料を ありがとーござい
ます。読んでいて 思うのですが、漢点字文で あ
つても 普通に 升明けを した方が ずっと 読
みやすいと 感じて います。川上 先生の 意わ
十分に 分かるのですが、読みやすい、早く 読
めると いうのも 大事な 要素だと 思います。
その点 お考え いただけないでしょーか？

感想を 書かせて いただきました。今後とも
宜しく お願い いたします。」

というものです。読者のお一人から頂戴しました漢点字文を、そのまま墨字文に直してみました。

要約しますと、「川上先生は、漢点字の文章は、従来のカナ点字の文章とは違って、分かち書きをする必要はない、とおっしゃって分かち書きをしないようにして来られたが、触読の見地からみれば、やはり従来の点字文に従った分かち書きをする方が、触読し易いと思うので、検討していただきたい。」ということになります。「普通に 升明けを」というところを、「従来の点字の分かち書き」と解してみました。「従来の点字の分かち書き」というのがどういうことを言っているのか、そのことからご紹介して参りましょう。

ここでいう「従来の点字」とは、漢点字に対して、これまで、と申しますか、現在も一般に使用されております「日本語点字」を言うもので、明治23年に、石川倉次によって翻案され、文部省によって「日本語点字」と認定された点字体系を言います。

これには漢字を表す点字符号は含まれておりません。いわゆる「カナ点字」だけで日本語文を表現しようというものです。「いわゆる」と申しましたのは、この体系には、ひらがなとカタカナの区別がありませんことと、表記法が墨字のカナ文字とは異なっており、分ち書きされなければならぬことによつて、正確には「仮名」ということもできないのではないかと考えられるからに他なりません。

このカナ点字の体系は、明治期に入ってから行われた、アルファベットで日本語を表そうという試みであるローマ字の構成を参考に、欧米から渡来した点字の体系を五十音表に当てはめたものです。その意味では「カナ点字」ではなく、「ローマ字点字」と呼ぶ方がふさわしいものと言えます。ローマ字にはひらがなもカタカナもありませんように、これは正しく「ローマ字点字」と呼ばれるべき点字体系ではあります。何時しか「カナ点字」と呼び習わされるようになりました。

ローマ字の表記法は、欧文の表記に倣ったもの

で、欧文の表記は、文章を単語に分けて、単語と単語の間にスペースを一つ入れる方式が採られています。アルファベットは音素文字ですので、発音される音声を音素に分けて、それを文字に置き換えて紙の上に移したものです。その文章の最小単位は単語と呼ばれます。その表記法は、単語と単語の間にスペースを入れることで区切りを付けるものでした。

ローマ字の表記もこれに倣って、日本語の発音を音素に分けて、それをアルファベットで表記するものでした。文章も単語の集合と捉えて、単語と単語の間にスペースを一つ入れて表すようになりました。

Kyo wa yoi tenki desu.

「Kyo」は「今日」、「yoi」は「良(い)」、「tenki」は「天気」、これらは日本語文の根幹をなす単語ということができ、 「wa」(は) と 「desu」も単語と捉えての表記となりました。手元に十分な資料がありませんので、確実なことは申せませ

んが、初期の日本語点字の表記もこれに倣ったものだったのではなからうかと考えられます。

きよー わ よい てんき です

このように単語ごとにスペースを入れる表記法を、点字の世界では「分かち書き」と呼んでいきます。さすがにローマ字の表記に倣った分かち書きは、触読文字である点字の触読向けには、評判が悪かったようで、現在は助詞と助動詞は、前の単語との間にスペースを入れない、ということになりました。従って右の単文は、

きよーわ よい てんきです

となります。勿論墨字でもこの程度の文でしたら、カナ文字だけで表記されても充分理解できます。実際カナ文字だけで表記される文章もありますが、このような表記にはならないはずで、「きよはよいてんきです。」でしょうか。

お気づきのように、ローマ字表記に倣った名残

が、ここに幾つかあります。①単語ごとの分かち書き(助詞・助動詞は、前の単語に付ける)、②助詞のははわ、へはえと表記する、③うで表されるウ音と才音の長音はーで表す、などです。後ろの二つは、明治初期に文部省令として発せられた、小学校においての仮名表記法に基づいたもので、「棒引き仮名遣い」と呼ばれています。これは一般には受け入れられなかったようで、直ぐに廃棄されました。が点字の表記には現在も有効です。点字の表記を墨字の表記に合わせるということは、兆しもありません。またお気づきのように、昭和30年代までは、句読符号も使用されておりました。読点は分かち書きで代用、句点はスペース二つで表すとなっていました。現在では原則として、分かち書きしながら句読符号を付すことになっています。

分かち書きの原則は右に述べた通りです。つまり単語と単語の間にスペースを入れる、助詞と助動詞は前の単語の後ろに付けるというもので、誠に緩やかにできています。これで片付くなら誠に目出度し

目出度しなのですが、原則が緩やかであれば、それだけ例外も増えるという、予想し得ることがそのまま現実になって参ります。

二、三例を挙げてみましょう。

「として」は一般に助詞として登場します。「…として…」、「と思つて、の状態で」の意味と広辞苑にはあります。したがつて「として」は前の単語に続けて表記されると理解できます。ところがこの「して」が、動詞「する」の活用の連用形ではないかという指摘が提出されました。もしそうならば、一つの単語ではなく、「と して」と二つの単語だと考えなければいけないことになりましたが、ならば助詞としての「として」はないものになるのだろうか、そうすると広辞苑の記述も宙に浮いてしまう、ということになります。

また助詞・助動詞はスペースを入れずに表記するとあります。「です、でした」は助動詞ですので、そのまま続けます。それでは「である」はどうか、この「ある」は助動詞ではなく、動詞であるから、

「で ある」とスペースを入れる必要があるということになります。

もう一つ、漢語の熟語は、漢字三つまではスペースなしに、漢字四つの場合は原則として前後二つづつに分けて、その間にスペースを入れることになっています。「試行錯誤」は「しこー さくごー」、「弱肉強食」は「じやくにく きよーしよく」と表記されます。これはあくまで原則で、これに当て嵌まらない熟語も数多く出て参ります。

頻繁に使用される熟語に「五里霧中」がありません。このように漢字を並べて読めば何のことはないと思える熟語です。意味は五里に渡る霧の中に迷い込んで、前後不覚の状態になってしまふというものです。これにどのようにスペースを入れるか、原則通り「ごり むちゅー」でよいか、それとも別の表記にするか。同様に「蝸牛角上の争い」という格言はどうか、これも原則通り「かぎゅー かくじょーの あらそい」でよいか…。このような例は無数に出現して、点訳者の皆様を繰り返し悩ますことに

なっていました。

さてそれでは実際に文章を従来の点字文に点訳しようとする場合、どのようなことになるのでしょうか。ほんの僅かではありますが、例示してみましよう。

山内薫さんの著された『本と人をつなぐ図書館員』の後書きの冒頭の部分を使用させていただきます。

公共図書館は地域に生活するすべての人に開かれている。

誰もが図書館や資料を利用する権利を有しているのだ。それは、生まれたばかりの赤ちゃんから寝たきりのお年寄りまで、目の見えない人から矯正施設に収監されている人まで、すべての人を含む。

しかし、図書館や資料を利用したくても利用できない人が大勢存在する。そうした人に対しては、その人のもとに出かけていったり、読めるように資料

を変えなければならぬ。こうしたことを実現するのが、いわゆる障害者サービスと言われる図書館サービスだ。

図書館の障害者サービスは、心身に障害のある人へのサービスを指すわけではなく、図書館や資料を利用しようとしたときに、何らかの障害が生じた場合に、その障害を取り除くサービスである。

この文章をカナ点字の点字文に変換するのだが、分がち書きされていない文章を分がち書きしようというのであるから、結構勇気が要ります。どのような勇気かといえ、もとの文章を別の文章に替えてしまうのではないか、こういう虞のようなものと言えるように思われます。それを振り切ってやってみましょう。

私の妻は、中学生のときに視力を失って、盲学校に入学しました。そこから点字の世界に入ったのですが、この分がち書きには、なかなか慣れることが

できませんでした。そこで級友にそのコツを尋ねたところ、これもユニークな答えが返ってきました。

「文章のそれらしいところにネを入れてみて、おかしくなければそこにスペースを入れればいいんだよ」というのです。如何にも未熟な稚拙な考え方に聞こえますが、よく考えてみると、案外正鵠を得ているものかもしれません。そこでこの考えに沿って、右の文章に分ち書きを施してみましよう。

.....
公共図書館は地域に生活するすべての人に開かれている。

誰もが図書館や資料を利用する権利を有しているのだ。それは、生まれたばかりの赤ちゃんから寝たきりのお年寄りまで、目の見えない人から矯正施設に収監されて

いる人まで、すべての人を含む。しかし、図書館や資料を利用したくても利用できない人が大勢存在する。そう

した人に対しては、その人のもとに掛けていたり、読めるように資料を変えなければならぬ。こうしたことを実現するのが、いわゆる障害者サービスと言われる図書館サービスだ。

図書館の障害者サービスは、心身に障害のある人へのサービスを指すわけではなく、図書館や資料を利用しようとしたときに、何らかの障害が生じた場合に、その障害を取り除くサービスである。

.....
(句読点の前にもネを入れてみました。)

本来でしたら次に、漢字の部分カナに替えた表記にしてご覧に入れるところですが、それは皆様の想像にお任せしたいと思います。むしろこの「ネ」という音を挿入してみると、ばかばかしいときえ思われる試み、その「ネ」に当たるところにスベ

ースを入れれば、従来の点字の分かち書きの原則に適った表記になるという事実、これは重大な何かを暗示しているように思われます。

川上先生は、私たちに「漢点字」という、画期的な触読文字を残して下さいました。その表記法も、従来の日本語点字の表記法である分かち書きを廃棄して、一般の文字の表記に倣った表記法を採用なさいました。それは、先生が年来抱いておられたこの分かち書きへの疑問によりました。

日本点字委員会によれば、従来の点字の表記法に大きな位置を占めている分かち書きは、その原則に従えば、カナ点字だけでも充分に文章を表現できると評価しておられます。しかし歴史的にはその順序は逆で、漢字を表す触読文字を案出しないまま現在に至り、漢字の体系の触読文字に目を瞑って、従来の日本語点字の表記法で充分文章を表現できるとしなければなりません。そうしなければ、委員会の権威を保つことができないからです。現在でもそのように固執しておられます。

川上先生は、漢字の体系のない文字で、漢字の知

識を持たない者が、音を頼りに読書をするということに、大きな違和感をお持ちになられたのでした。

しかもそれを分かち書きする。分かち書きされた文章の分かれたところに「ネ」を挿入してみると、これは実に細かな区切りを示していることに気付かされます。従来の点字文ではそこがスペースになっているために、気付かぬまま過ぎてしまったに違いありません。先生は、文章をブツブツと切り刻んでいるのが従来の点字文の表記だと感じておられたようでした。時折漢点字協会の機関誌の『新星通信』に、「カナ点字の分かち書きでは、短歌のリズムが台無しだ」とお書きでした。

一つ、短歌の例を挙げてみましょう。

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山

「小倉百人一首」の持統天皇の御歌です。

私はこの漢点字の活動を始めるまでは、短歌のリズムとは五七五七七のことだとばかり思っておりま

した。勿論このリズムがベースにあるのですが、まるで西洋音楽がドレミファの音階によって構成されているながら、作品となるとその音階を遙かに超えた羽ばたきを見せるように、短歌も、五七五七七という韻律の中に、更に区切りや切れ字と呼ばれる技法によってリズムの変化がはかられることを、この間に知りました。現代短歌では、句読符号やスペースの導入も盛んで、リズムの変化を自在に操った歌も、決して珍しくありません。そのような短歌を見ながら、川上先生は、右のようにおっしゃったのであろうと、現在の私は考えております。

さてこの持統天皇の御歌、カナ点字の表記法によって表記したらどうなるか、ご覧下さい。

はる　　すぎて　　なつ　　きにけらし　　しろたえの
ころも　　ほすちよー　　あまの　　かぐやま

如何でしょうか？皆様これをどうお読みになられましようか？

以上、この例からお分かりただけですように、従来のカナ点字の分かち書きで表された文が、単に

漢字の知識を与えないばかりでなく、日本語のリズムの偏向にまで及んでいることを、川上先生は看破しておられたということが、遅まきながら私にも理解できるようになってきた次第です。

その意味で、読者のお一人から頂戴したこのご提案は、触読し易い漢点字文とはどのようなものかということを考えてみなければいけないことをお示し下さいました。ご提案のように、従来の点字表記法である分かち書きの規則を、そのまま漢点字文に当て嵌めることはできないことは右に述べた通りですが、直ぐに実現できずとも、行く行くの目標として、触読し易い漢点字文の実現について、その考え方を練る必要があることを、痛切に感じた次第です。

こうしてみると、川上先生の奥様がこの四月にご逝去されましたが、漢点字の表記法については、まだまだ揺籃期を抜けてはいないという感を強くせざるを得ません。知恵も力も乏しくはありますが、頑張っ行ってきたいと思っております。

点字から識字までの距離（一〇四）

野馬追文庫（南相馬への支援）（二二）

ちゅうりつぷ文庫からの手紙

山内 薫

前回、前々回に引き続き、今回はちゅうりつぷ文庫を主宰されているGさんに寄稿をお願いしたところ「今回原稿依頼があり、皆さんと相談した結果『野馬追文庫さんへの手紙』と決まり、五月二十九日（月）文庫に遊びに来た、お母さんと、お友だち、私の娘、孫も参加しました。」というメモと共にたくさんのお手紙、文庫だよりなどもお送り頂いたのをご紹介する。

ちゅうりつぷ文庫（Gさんの旧宅）には、私も二〇一五年の五月に南相馬を訪れた際伺ったが、その後別の場所に引っ越しされ、今年の一月から文庫を再開なさっている。文庫の紹介文には次のように記されている。

「平成一八年一月から、子育て、孫育て中の方の居場所づくりとして、自宅を開放して、姉（元保健

師）、いとこ（元音楽教師）で、ちゅうりつぷ文庫を開始しました。

毎週月曜日、一〇:〇〇～一一:三〇

第二、第三月曜日は、南相馬市原町子育て支援センターで実施しております。

内容は、さまざまですが、絵本、紙芝居、などの読み聞かせを毎回実施しています。

毎月発行している文庫だよりも今月で一四一号になりました。

震災前は、一〇組ぐらいの利用者も震災後は二、三組と減少しましたが、休むことなく継続しております。

毎年八月には、南相馬市立図書館「おはなしの蔵」にて平和おはなし会を実施。

野馬追文庫さんより平成二六年から支援を頂いております。感謝しています。

ちゅうりつぷ文庫とは、ちゅうりつぷの歌「どのはなみても きれいだな」どなたでも、わけへだてなくという意味で付けました。」

お送り頂いた文庫だよりは、丁度震災前の六六号（平成二三年三月一日）、震災後の六八号（平成二

三年五月一日）、お孫さんの事が載っている、そして野馬追文庫からちゅうりっぷ文庫に初めてお送りした本が載っている一〇八号（平成二六年九月一日）、ちゅうりっぷ文庫主催で、南相馬市立図書館おはなしの蔵で毎年開催されている「平和」や「命の大切さ」のお話会のポスターの載った一三一号（平成二八年八月一日）、そして今年発行された一三六号から一四一号の全一〇号分。

文庫だよりはA三版二つ折りの四ページ立て横書きで、一ページにはタイトルと今月の詩、その月の予定、絵本の時間（ここには新着絵本や野馬追文庫から送られた本が載っている）、二ページから三ページの中開きと四ページには開催された文庫の行事等のカラー写真が何枚も載っており、四ページ目にはお知らせなども載っている。（カラー写真になったのは最近のことで古いものは中開きのページは空白のまま）

震災直後の六八号（平成二三年五月発行）の今月の詩は

ちゅうりっぷ

何事もなかったかのように

今年も沢山のちゅうりっぷの花が
きれいに咲いた

まつすぐ おひさまに向かって

さあ ちゅうりっぷの花のように

明日に向かって 前進しよう！

とあり、裏ページには六人のメモがそのままコピー掲載されている。

「うみにあそびに いきたいなあ みいな（四才）」

「ちゅうりっぷぶんこのおともだち げんきですか

みらいは げんきで ようちえんに いてます

みらい」

「服し負けん！ 切磋琢磨 みんなで力を合わせて

自慢できる原町にしよう!! A」

「人の目が体の前についているように、横や後ろばかりを見るのではなく、前を向いて生きていきましよう。必ずや、その先には光が待っています。S

私は信じてます。あなたのその力を。」

「ちゅうりっぷ文庫さん 色々楽しい思い出ありがとうございました。ちゅうりっぷ文庫でお世話になった皆さん ありがとうございます。今回の

東日本大震災で避難されている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。又いつか元気でちゅうりつぷ文庫さんでお会いするのを楽しみにしています。

Y」

「身体が揺れています。心が震えています。でもあの日の様な怖さはありません。一日一日、一步一步力強く生きると誓ったからです。皆様にお逢いできる日を楽しみに笑顔を忘れず頑張ります。いやがんばりましょう M」

それでは皆さんから届いた手紙（メモ）を紹介する。

先ず文庫の主宰者Gさんから

「野馬追文庫の皆様へ

毎月心のこもった絵本を届けて頂きありがとうございます。点字の絵本やもこもこグループさん手づくりの布絵本、エプロンシアター、おすしセットなどは子ども達に大人気です。めずらしい興味深いもので私自身も楽しみに利用させて頂いております。（グーチョコキパーでなにつくろう！）年齢関係なく、参加型読み聞かせに大活躍です。ちゅうりつ

ぷ文庫 G」

「いつも文庫に絵本を届けていただき有難うございます。布絵本特に点字の絵本は存在すら知らず、自分が意識してさがさなければ目にする事もなかった本だと思えます。感謝しております。肌を通して心に響く本だと思えます。本当に有難うございました。ちゅうりつぷ文庫 M」

二才から四才までの子どもたちから（七つのうち五つはお母さん代筆）

「楽しく読ませていただきました。本の好きな子なので助かります。ありがとうございます。朝飛（二才）」

「様々な内容を一冊にまとめた有意義な雑誌でした。子供と楽しめました。ありがとうございます。ちほ（二才）」

「子供の心の栄養になる絵本のプレゼントをありがとうございます。みのり（二才）」

「手作り布絵本 楽しく見せていただきました。ありがとうございます。ゆいと（四才）」

「絵本が大好きで毎回楽しんでます。本当にありがとうございます。あやか（四才六ヶ月）」

「ありがとう あやか」（自筆）

「（顔と何かの絵）」（自筆）

次に小学生の二人から

「私はちゅうりっぷ文庫さんで、野馬追文庫さんから送っていただいた本を読ませていただいています。いつも、次の本がくるのを楽しみに待っています。すてきな本をありがとうございます。私は本が大好きです！点字さわる絵本やエプロンシアターやぬの絵本、その中でもぬの絵本の「七ひきの子やぎ」が印象的で心に残っています。いつもありがとうございます！ 山上小五年 Y」

Gさんのお孫さんと相模原市に住む同じく小学校五年生のAさんから

「野馬追文庫の皆さんへ

私は、野馬追文庫の本が大好きです。知ったきっかけは、ばあば（ちゅうりっぷ文庫）の図書館での読みかせで『これはわらぶきやねのいえ』を読んでいたで知りました。この本は心に残るおもしろい本でした。私は夏休みばあばの家に行って図書館で読みかせを二年生でばあばといっしょに「ええところ」を読みました。私はしょうらい保育士になろう

と思っています。私のいとこが三才と一才なので、そのお世話と読みかせを合体して大人になって保育士になって読みかせをやめないで大人になってそれを生かせられたらいいと思います。 広陵小学校

五年一組 A」

文中の「これはわらぶきやねのいえ」は布絵本を製作しているグループもここの作品で、児童文学作家杉山亮さんが伝承話をおはなしライブで語ったものを元に作った布絵本。野馬追文庫から初めてちゅうりっぷ文庫にお送りした本の一つで、この時には『はしれディーゼルきかんしゃデーデ』と『かいじゅうたちのいるところ』の合わせて三冊を送っている。丁度お送り頂いた文庫だよりの一〇八号（平成二六年九月一日）の今月の詩には「孫」というタイトルで次の様に記されている。

「始めて二年生の孫が夏休みを利用して相模原から一人で田舎に泊まりにきた。

孫の思い出づくりにと、夏まつり、プール、霊山子ども村、図書館、七夕、映画鑑賞など盛り沢山の計画を実施。じいじとばあばは楽しい時を過ごした。帰省した孫から“楽しかった”との便りに、ほ

つと疲れがとれた。」

おしまいのお手紙は世田谷に住んでおられるGさんの娘さんからのもの

「野馬追文庫さんへ

ちゅうりっぷ文庫に点字の絵本が届いた！と聞いた日のこと、私は今もくつきりと思ひ出します。

何故なら、息子（二歳半）は先天性のがんにより生後六ヶ月で左眼を神様にお返しすることになり、残された右眼ががんに蝕まれないよう願う日々のことだったからです。それはちょうど息子が両目を失うかもしれない世界を想像していた時のことで、息子の命さえ残してもらえさえすれば、その後どんな困難にも立ち向かうという覚悟で息子の健康を願う毎日でした。

その頃、私には点字の知識もなく視覚支援学校の育児相談へ初めてでかけ、点字が実は身近なものであったことを知り、更には点字の絵本が野馬追文庫さんから届いたと聞いたことで『目が見えなくても生きていける！』そんな希望が持てたのです。

時を経て、幸いにも右眼への転移もなく右眼の視力もそれなりにあるようで母としては命を繋げたこ

とに安堵しているとこです。運動・精神発達遅滞等もありさまざまな育てにくさもある息子です。

それでも絵本は大好きです。

特にページをめくるのが大好きです。

大好きな絵本は噛んでしまうこともあります。

息子が噛んだ絵本は息子が好きな本！

息子が噛んだ絵本は娘（一才三ヶ月）も噛みます。

実家へ帰省すると子供たちは文庫のお部屋で遊びます。

子ども達が目を輝かせて真剣な表情で選んでいる姿が私は好きです。

ちゅうりっぷ文庫は基本的に母がセレクトする絵本ばかりでしたが新しい風を吹き込んでくださりありがとうございます。

きっかけは震災、と残念なことではありましたが、これからもこの縁が続きますよう、今度はこちらからもバトンを渡せるように頑張ります。

“愛の反対は無関心” マザーテレサの言葉です。

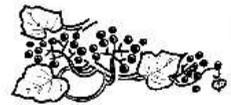
関心を寄せてくださっていることに感謝いたします。

東京都世田谷区経堂 S

「東京漢点字羽化の会」第136～138回

例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2017年4月の例会(第136回)4月12日(水)

13…30～15…30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

この4月から会長を新しく野田様が努めてくださることになった。よろしくお願いいたします。

ボランティア保険の更新をしていただきました。

朝日の歴史学のグループ分けを決めていただきました。

5月17日の横浜での印刷を、3人の方が行ってくださることに決まった。どうぞよろしくお願いいたします。

『古語辞典』の進捗状況を報告していただいた。

2017年5月、6月の活動日を確認した。

2017年5月の例会(第137回)5月10日(水)

13…30～15…30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

朝日の記事の入力グループわけをした。

5月17日の横浜での印刷は3人の方が行ってくださった。

この次の校正について説明に来てくださる予定であると、岡田さんから報告があった。

5月20日の学習会のサポートをしてくださる方について確認した。木村はこの日、大阪の日本漢点字協会のことで大阪へ行く。

古語辞典の全体の進捗状況についての報告を受けました。

8月の予定を決めた。予約やその事務書類については新しい会長さんが引き受けてくださることになった。

入力に使う記号やその方法について新たに岡田さんが説明してくださった。

2017年6月の例会(第138回)6月7日(水)

13:30~15:30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決めた。

7月の例会には、横浜から吉田様が、萬葉集釋注校正についての説明に来てくださり予定であると、岡田さんの報告があった。

日本漢点字協会の川上リツエ様が4月5日に亡くなられたので、5月20日土曜日に協会の今後のあり方についての話し合いがあり、木村は、その報告をした。「日本漢点字協会」という全国組織は結果的には終息への道を進むしかないとお話しした。

岡田さんが、漢点字が広がらない理由の一つに、漢点字の読みづらさについてお話をした。朝日「歴史学」や歌壇・俳壇・健康記事の漢点字読者からの提案を含めて岡田さんが具体的に説明をしてくださった。

* 予告

2017年7月の例会(第139回)7月12日(水)

13:30~15:30、ヒューマンプラザ

7階第1会議室

2017年7月の学習会(第111回)7月22日(土)

17:30~19:30、ヒューマンプラザ

7階第2会議室

2017年8月の例会(第140回)8月16日(水)

13:30~15:30、ヒューマンプラザ

7階第1会議室

2017年8月の学習会(第112回)8月19日(土)

17:30~19:30、ヒューマンプラザ

7階第2会議室

2017年9月の例会(第141回)9月13日(水)

13:30~15:30、ヒューマンプラザ

7階第1会議室

2017年9月の学習会(第113回)9月30日(土)

17:30~19:30、ヒューマンプラザ

7階第2会議室

わたくしごと

「あれ？ひとりで十脚？」

ある日、疲れたわたしは夕食の後片付けもせず、ぼんやりと日常のあれこれのことを考えていた。

すると突然、一人暮らしのわたしが十脚もの椅子を所有していることに気づいて、自分でも驚くほどすつとんきような声を出していた。

夫と二人でこのアパートに越してきた15年前まで、椅子など全く縁のない暮らしをしていた。

なにしろ、6畳一間に僅かな板の間があり、そこには最小限のスペースでトイレと流しがあり、あとは冷蔵庫と洗濯機とガス台を置けるだけだったのだ。ありがたいことに、今思い返してもその暮らしぶりに不満を感じたことはない。

ただ、家主から、古びたこのアパートを壊して建て直すという理由で立ち退きを言い渡されて、慌てて家探しをし、幸運にも現在の所へ越して来られたのである。

下見に来たわたしたちの驚きは、これまでとは比べものにならない広さであった。一緒に見に来た我が姉親子の、扉を開けての第一声は「明るい！」と「広い！」の同時の叫びだった。

これまではビルに囲まれた路地奥の、さして陽の当たらない所だったし、新しいところは9階で、ワンフロワ形式で、建具を上手に使えば、六畳二間、四畳半一間、四畳半強のダイニングキッチン？そして今までには無かったお風呂！ ふふ？言うまでもなくトイレットも！

今でも姉親子の驚きの声を思い出すだけでわたしは笑えてくる。当のわたしたちはこれまでの暗さも狭さもちつとも苦にしていなかったのだから。

もつとも、少しは視力があつた夫は、わたしとは違って、薄暗さは不便だったと思う。

さて、引っ越しの手順である。当然今まで暮らしていた所で使っていたものを捨てたものは殆ど無く、わたし一人で近所のなじみのスーパーからダン

ボールを幾つもいただいで来て、本を詰め、食器その他の日常雑貨を詰めた。衣類も、洋服箆笥に掛けてあるものだけはきちんと畳んでダンボールに詰めた。

次の段階、というより、一つの箱に詰め終えては、点字で通し番号と、おおよその中身の内容メモを書いて、一つ一つ箱に貼っていった。

次はこのダンボールの山を何処へ置く？

これがまた恵まれたことに、同じアパートにいらした隣のお部屋の方はすでに家移りをされているので、その空き部屋を自由に使っていると家主さんが言ってくださったのだ。

わたしは番号順にお隣さんの部屋に運んだ。

ここまでは時間さえかければわたし一人でできる作業であった。

このようにわたしができる範囲で準備をしている間に、姪が引越し先の見取り図を、平板と桟木（さんぎ）を使って、家の中の間取りの実態図を作ってくれた。

「おばちゃん？これで部屋の形が分かる？これを見ながら、洋服箆笥はこの部屋に、どの向きで置くかよく考えてね。そしたらわたしたちが荷物を運んだとき、おばちゃんの希望通りに置いて来られるからね」と言ってくれた。

わたしと夫は、家が空っぽのうちに掃除道具を抱えて何回も通った。

そして引越し全般を引き受けてくれた姪夫婦がバリバリ働いてくれた。

まずは、洋服箆笥、整理箆笥、食器戸棚、冷蔵庫、洗濯機などの大物である。

衣類家具の引き出しは洋服を入れたまま、引き出しを抜き取り、空の家具をトラックに積んでから、一端外した引き出しをトラックの上に乗せた家具に元通りに納めてくれた。

冷蔵庫や食器戸棚は当然すでに空にしてある。

そのほかわたしが詰め込んだいくつものダンボールも積み込んだ。

わたしたちが最後の一晚を過ごすための布団を省いたもの一切はこうして姪夫婦によつて新しい家へと出発した。

姪たちのきめ細かい気配りのお陰で、予め相談したとはいえ、引越し先にそれぞれあるべき場所にセツトしてくれたのはありがたかつた。

さいごの布団とわたしたち二人を運んでくれたのは、姉が運転する車であつた。そして姉とわたしは正式に役所に「入居届け」をしに行き、書類上も完了した。

荷物全てが運びこまれてはみたものの、これまで小さく収まっていたわたしたちは、落ち着き場所、よりどころのない頼りなきで困つた。

姉親子が来て「うーん」とうなつていた。

そこで食卓用セツトを探しに行こうと姉親子がわたしを連れ出した。

買い物上手な姪が、わたしたちに手頃な羽出しテ

ーブルと折り畳み椅子四脚セツトを探してくれた。姪は店に展示してある見本を使つて触らせながら、組み立て椅子を使わないときはテーブルの下に収納出来ること、羽だし板の扱い方（テーブルを3通りの大きさに変えられること）など実際に、わたしにやらせて納得させてくれた。

「おばちゃん？これは組み立て料金付きの配達を頼んだから、おばちゃんたちはなにも心配しなくていいのよ。もう支払いも済んだから後はお約束の日におばちゃんたちが家に居ること。それだけでいいからね。ただね、普段は組み立て椅子は不安定で危ないから、わたしが今度おじちゃんとおばちゃんが普段使う椅子二つを持つてくるからそれを使つてね。おばちゃんの好きな木組みだけでも古いから、それが壊れたら、そのときまた考えましょう」と懇切丁寧に話してくれた。

姪の夫は風呂周りのスノコ、衣類や小間物を置く棚、玄関とダイニングとの間仕切り用アコーデイオンカーテンなど必要なものを、できるだけ木を使つ

て作ってくれた。

彼が大工仕事をしているところを通りかかった同じフロワの方が「おたく、このせがれさん？」と聞いていた。彼はテレながら「いいえ、ただ二人がこれから暮らしていきたいようにと思つて」とだけぼそつと言っているのを聞き、その優しさにわたしは胸がキューンとなり涙がこぼれそうになった。

話は椅子のことからすっかりそれてしまったが、6脚の椅子は食卓周辺に置かれ、たちどころに居場所が整えられた。

事実親類でなく、知人が我が家の様子を見に引越した後半月も経たぬうちに来て、この6脚全部を一度に使うことができた。我が家の椅子の数に合わせた訳ではないのに、この椅子たちの活躍の幸先の良さをわたしは喜んでいた。

第7脚目は、姉の家に以前からあったものが、わたしのお気に入り、チャンスがあれば欲しいと思つていて。今度の引越しを機に、「もしや？」と

姉夫婦におねだりしたら兄が直ぐ「ああ、持つて行っていいよ」と言い、続いて姉もうれしそうに「今度わたしが持つて行くわね」と言つてくれたものである。これは素朴なもので箆笥の側に置いた。

第8脚目はわたしの友人が「一男さん（我が夫）は畳に座っているだけでは疲れるから、たまには椅子に変えてもいいと思うの。わたしクッションも付けてもう注文して、明後日届くことにしちゃったけど、たえちゃんの家になかったら届け日を変えるけど？」と言つた。

わたしは恐縮しながら感謝して受けた。そして豪華な肘掛け付き、リクライニング付の椅子が届けられた。

このようにして揃つた8脚の椅子は、夫とわたしと、この家で5年間大事に使つてきた。

とくに普段の食卓用椅子は、これまで長いこと使われていたこともあつて、だんだん木のかみ合わせが削れてきて、始終「とんとん」と手で打ち込まないと外れそうになり始めた。それでもわたしたちは

大事に使い続けた。

けれども、その2脚の椅子が壊滅する前に夫の病は重くなり、2008年にわたしを残して逝ってしまった。

一人になってしまったわたしは、いつ分解して怪我をしないとも限らない、怪しげなものを9年もの間手を加えながら2脚とも使い続けた。

そして最近、大事な友人が、突然引越しをすると言う。しかも引越し先は今より狭くなるので、余分になった椅子をなんとかしたい、「捨てるには惜しいし：かと言って古くなったものを誰かに使つてとは言えないし：」と言う。「う、う、ううん？：本当に捨てるの？」わたしはいじましいことを考えた。そして思い切つて「もしほんとに捨てるのならわたしにくださる？」と言つた。

彼女もわたしの哀れな椅子を知り尽くしているの
で、このような言い方をすればわたしが欲しい、と言
えるだろうと思ひやってくださつたのだと思う。

話はちゃんちゃんとキマリ、ある方の助けを借りて、早速9、10脚目の我が家への移動となつた。

この9、10脚は、形はまるで異なるが、どちらも貫禄のある最高級の木工家具の一級品である。一つは肘掛けも立派で、背もたれがたっぷり大きく、頭まである、堂々としたもので来客用だ。もう一つは、丸みのあるもので、肘掛けもあり、背もたれの高さは34、5センチくらいで、これはむしろ立ったり座つたりするのに動きやすく、わたしの日常使いとした。

わたしの満足度は充分である。

他人（ひと）は、「それでは危なっかしい二つの椅子は捨てられたのですね？」と言うかもしれない。いえいえ、この二つの椅子には思い出が一番詰まっている。

どうして捨てられよう？

痛々しい椅子に埋木（うめき）をしてくださつたり、木工用接着剤を使って補強してくださつた方が

いる。

わたし自身でも、ひもやガムテープを使って、見た目は哀れでも、分解を免れるように努力もした。なにより大切な人の思いが山ほど詰まっているのだ。

この二つのうちの一つは、パソコンを使う度に食卓から運んでいたのだが、これで居場所がかなり定まった。いいえ、もっと活躍している。

電気のカサやカーテンレールなど高い所を拭くときにもこの椅子の方が持ち運びが楽なのである。

もう1脚は、座面には米びつを、椅子の下には水を置いて、これはこれで台所が整理され、大きな役割を果たしてくれている。

「ひとりで十脚」は今のわたしには無駄がない。

欲張り？ 執着？

いいえ、食卓下の椅子を除いてどれも豊かな個性を持ったこれらの椅子に座って、あの人との語り、この人とのお話、思い出を詰め込んだこれらの椅子たち。みんなみんなありがとう。

一〇報告



本誌前号（一一〇号）で、第一報としてご報告申し上げましたように、この四月五日に、日本漢点字協会の会長をお務め下さっておられました川上リツエ様が、お亡くなりになりました。

川上リツエ様は、御夫君の泰一先生が創案されました漢点字の普及にご尽力下さって、泰一先生ご逝去の後、その意志をお継ぎ下さいました。二〇年を越える年月、協会の会長職をお引き受け下さいました。行年九十三歳でした。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2017年6月21日 水曜

漢文のページ

不^レ患^ヘ 人^ニ之^ヲ 不^レ己^ヲ 知^ラ。
患^レ 不^レ知^ラ 人^ヲ 也。
（『論語』学而）

人の己^{おのれ}を知らざるを患^{うれ}えず。
人を知らざるを患^{うれ}う。

他人が自分を分かってくれない
ことを気にすることはできない。
自分が他人を理解できないこと
のほうを心配すべきである。

不己知^レ || 「不^レ知^レ己^レ」が普通の語順。
強調表現の場合、このよう
に転倒することがある。

参照図書 祥伝社新書 渡辺精一
『朗読してみたい 中国古典の名文』

|| 論語由来の四字熟語 ||

温故知新^{おんこちしん}

昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること。（『広辞苑』）

温^{ネテ} 故^{キテ} 而^レ 知^レ 新^{シキテ}、

可^シ 以^テ 為^ル 師^ニ 矣[。]

（為^{イセイ}政）

故^{ふる}きを温^{たず}ねて新^{あたら}しきを知^しれば、
以^{もつ}て師^た為^らるべし。 ※故^{ふる}きを温^{あた}めて
の訓もある。

下学上達^{かがくじょうたつ}

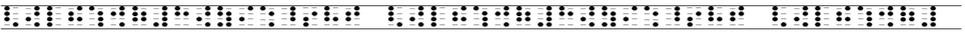
日常の身近な所から学んで、次第に深遠な学問に進んで行くこと。（『広辞苑』）

不^レ怨^ミ 天^ヲ、不^レ尤^メ 人^ヲ、

下学^{シテ} 而^{シテ} 上達^ス。

（憲^{けんもん}問）

天^{うら}を怨^{とが}みず人^{とが}を尤^{とが}めず、
下学^{とが}して上達^{とが}す。



不 患 へ 人 之 不 ル ヲ 己 ヲ 知
 ラ 。 患 ウ 不 ル ヲ 知 ラ 人 ヲ
 也 。

温 故 知 新 ` おんこちしん
 温 ネテ 故 キヲ 而 知 レ バ 新 シキ
 ヲ 、 可 シ 以 テ 為 ル 師 矣 。

下 学 上 達 ` か がくじょうたつ
 不 怨 ミ 天 ヲ 、 不 尤 メ 人
 ヲ 、 下 学 シテ 而 上 達 ス 。

孔子：前552～前479年。
 『論語』は、学而をはじめとする二十篇
 からなる、孔子とその高弟たちの言行録。



岩波文庫『論語』
 (金谷治 訳注)

小学館『論語なかよしかるた』より

編集後記

▼ 私事になりますが、昨年11月にマンションに引っ越しして、新しい書齋の中も落ち着きました。パソコン・プリンターなどかさばる機器を収納するので、それほど広くない書齋の中はだいぶ窮屈なものになっていきますので、不要物の整理が大きな課題となります▼まず整理の対象となるのが、創刊号以来大量に保存されてきた「うか」の冊子です。そこで、web担当の岸田さんと相談した結果、創刊以来の「うか」すべてをpdfにして、ホームページに公開することにしました▼最近の印刷原稿は、そのままプリントアウトすることが出来るようになっているので、簡単にpdfファイルを作ることが出来ますが、以前のものは紙の原稿しか残っていません。それらの原稿は、スキャン画像をpdfにすることが出来ます。そうすれば誰でも好きな号のすべての内容を目にする事が出来るわけで、更に大きく考えれば、世界中の人の目に「うか」を公開することになり、桁違いの情報発信力となることが期待されます。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。